
隠然

信上 公二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠然

【Nコード】

N0160A

【作者名】

信上 公二

【あらすじ】

日常の事件が思いもよらない出来事に発展。ある日、三浦琢也はなかなか附に落ちない事件と遭遇。その背景とは…！

ブローグ

剛一は朝から機嫌が悪かった。

普段から気性の起伏が穏やかな方ではあるが、ここ最近の失態にはおとなしくはいらなかった。

六月二三日の出来事に、いつもの朝の一服がまずくてたまらない。今までミスといえるミスは皆無だったから、トップにも可愛がられていたが、今では自分が前線から外されるという噂も聞こえてくる。ただ、この仕事から遠ざけられたくはない。

自分を愛し、信用し、期待されて育ててきた親のためにもまだ帰るわけにはいかない。

予定の時間より早く起きたつもりだが、パソコンの画面にはメール受信が表示されていた。

煙草を吸うのをやめ、メールを開いた。

「午後一時、例の場所に来てほしい。おいしい話がある。」

あいかわらずつまらない言い方をする。

おいしい話というのは個人的な利益、と考えているからかもしれないが、剛一にとってはあまり乗り気がしなかった。

「ある場所に住み、指示された事のみしていればいい。なに、難しいことじゃない。」

今思えば、あの時にその言葉の真意を疑えばよかったのだが、あの時点では過去の国への貢献が評価されたばかり思っていた。

しかし、そう不満ばかりを言うてはいられない。自分は恵まれている、それにこの仕事が家族のため、いやもっと大きなもののためになると思えば溜飲が下がる。

マウスポインタをメール削除のもっていき、ためらわずに削除し終え、背伸びをした。

質素な朝食を摂り、カーテンを開けたると、太陽がまぶしい。

剛一にはたまらない一時であつたのだが、昇ってきたばかりの太陽が沈んでいくように見えた。

「太陽も気付いたか、陽があたるのはここではないってことを……」

建物ばかりでなんの面白みない景色を眺めながら、新しい煙草に火をつけた。

煙草によつて吹き出された煙が視界に入つて、

「ここにはこの陰気くさい色が似合うな」

と思いながら祖国を想つた。

デスクに戻り、テレビをつけると、例の事件がニュースで流れていった。

触れてほしくない恥部を思いだされ、消してしまおうと手を伸ばすと、女性キャスターが妹に見えた。

慌てて手を引つ込めたが落ち着いて考えればありえないことだと気付き、不憫にも似ていると思つてしまった事を恥じた。

事のついでのようにテレビに見入っていると、スタジオから現場に画面が向かれ、中継アナウンサーが事件の概要を説明していた。「昨日の午前八時四十分頃、ここ、半蔵門線渋谷駅の地下に通じる階段のあたりで発砲事件がありました。被害を受けた、東岡さんは意識はあるそうですが、腹部を撃たれ重傷です。なお、渋谷警察署は……」

発砲事件が起きたというのに知らぬ顔で通り過ぎていくサラリーマンと淡々と説明するアナウンサーが画面に重なって、思わず苦笑してしまった。

「銃というのがあまり身近ではないこの国では感心は薄いのか」と安堵と多少の齒痒さを感じた。

隠密りに事が運べなかったのが痛手ではあるが、この後の行動に支障がでなければそれでよかった。

専門家らしき人とキャスターが口を交えているのを聞くと、安堵感
はさらに増した。

「宮本さんは、この事件をどう思われますか。単なる物盗り事件と
は思い難いのですが。」

「そうですね、東岡さんの所持品は日用道具しか入っていなかった
そうですから、単なる物盗りではないと思います。」

「では、宮本さんの見解としてはどうお考えですか」

「私は、間違われてしまったのではないかとおもいます。憶測です
が、麻薬か何かの取引があり、その場で待ち合わせたところ、東岡
さんと勘違いしたのではないかと考えます。ヤクザ関係ではないか、
というのが私の見解です。」

剛一はこの専門家が好きになった。

見事に事件をまったく違う方向へ導いてくれたことに感謝した。

しかし、物事を短絡的に考えないようにしているので、テレビを鵜
呑みにはしない。

ただ、自分の失敗を慰めてもらえたのが、一時的とはいえ、これか
らの行動を力付けるものにした。

テレビを消し、もう一度窓からの景色を眺めながら、先の事を考え
た。

「次からは失敗は許されない。もし、次があれば俺は消されるな……」

家族の住む方角に視線をもっていき、両親、兄弟の顔わそれぞれ思
い出すように目を閉じ、自分の使命を改めて感じた。

だが、それと同時に言い表せない不安がでてきた。

自分が感じて、口に出してしまった事が起きそうな漠然とした不安
が。

顔を手で気合をいれるように叩き、考える事をやめ、準備に取り掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160a/>

隠然

2010年10月9日23時15分発行